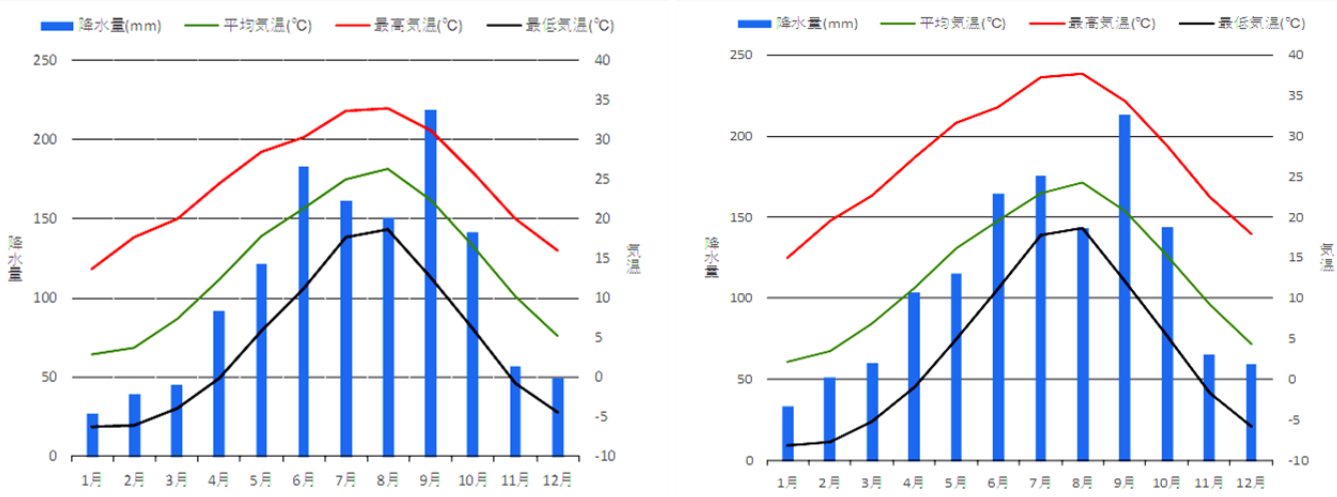
3-1-4　気象環境

小川町は関東平野の中央部に位置するため、典型的な太平洋岸式気候であり、冬は乾燥した北風あるいは北西風が吹きやすい。当地域の気候概況は、埼玉県の中では穏やかであり、年間平均気温は寄居で 14.2℃、鳩山では 13.2℃であり、最高気温は 8 月の鳩山で 37.2℃になる。

降水量は 9 月に最も多く、1 月が少ない。年間降水量は寄居で 1288mm、鳩山で 1330mm である。

■図 14　気温・降水量【 左：寄居　右：鳩山】



資料 1）図 14 及び表 3　気象庁ホームページ　過去の気象データより
使用データ 観測地点：寄居、鳩山 期間：図 14　2006 年 1 月～2016 年 12 月、表 3　1981 年 1 月から 2010 年 1 月
項目：平均気温・最高気温・最低気温・降水量・風向・平均風速

■表 3　風向【 左：寄居　左：鳩山】

風向は、春から夏にかけては東から南東、秋から冬は西から北北西に変わる。強い風が吹く時期は双方とも 2～3 月で、寄居で風速は 1.4m/s、鳩山 1.5m/s である。平均風速は、双方とも 1～1.1m/s 程度となっている。

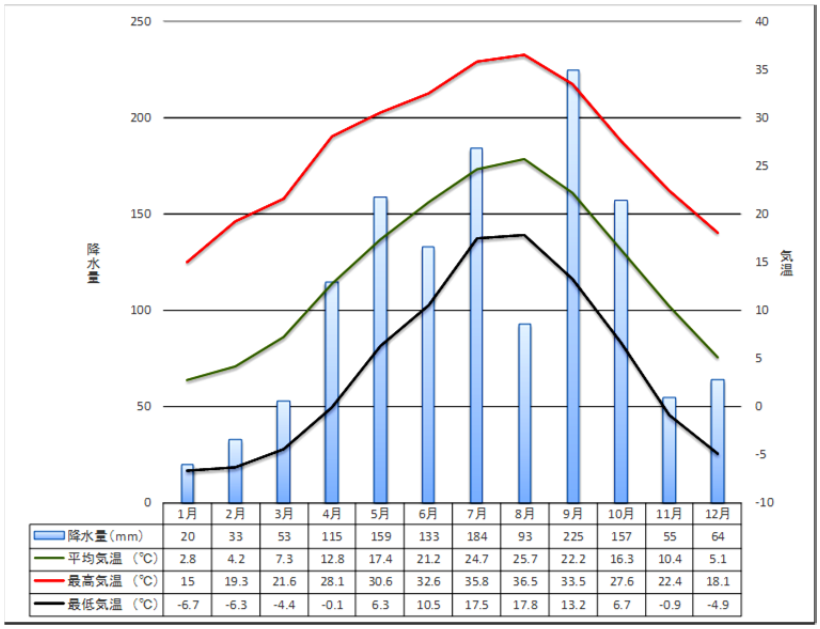
寄居			
要素/月（季節区分）	平均風速	最多風向	
		出現率（%）	風向
1月	1.3	16	西
2月	1.4	14	西
3月	1.4	12	西北西
4月	1.3	9	西
5月	1.0	10	東南東
6月	0.8	11	東南東
7月	0.7	10	東南東
8月	0.7	11	東南東
9月	0.7	6	東南東
10月	0.8	11	北西
11月	1.0	12	西北西
12月	1.2	17	西
年	1.0	10	西

鳩山			
要素/月（季節区分）	平均風速	最多風向	
		出現率（%）	風向
1月	1.3	15	北北西
2月	1.5	16	北西
3月	1.5	15	北西
4月	1.4	11	北西
5月	1.1	7	北北西
6月	0.8	6	東南東
7月	0.8	6	東南東
8月	0.8	6	東南東
9月	0.7	7	北西
10月	0.8	9	北北西
11月	0.9	11	北北西
12月	1.2	15	北北西
年	1.1	10	北西

また、町内では国土交通省荒川上流河川事務所の雨量観測所（小川町大塚 1105）がある。観測所から史跡指定地（割谷地区）まで直線で約 3 ㎞である。

ここでは、年間平均気温は 14.1℃、最高気温は 8 月の 36.5℃、最低気温は 1 月で-6.7℃になる。年間降水量は 1291㎜ で、降水量は 9 月が最も多く 225㎜ で、1 月が少ない。最大時間降水量（毎時観測。暫定値を含む。）が 50㎜ を超えた回数は、2007 年から 2016 年の 10 年間で 3 回ある。

■図 15　　気温・降水量【小川】



資料 2）国土交通省ホームページ　水文水質データベースより
使用データ 観測地点：小川　　期間：2006 年 1 月～2013 年 12 月
項目：雨量
資料 3）環境省ホームページ　気象観測データより
使用データ 観測地点：小川　　期間：2004 年 1 月～2009 年 12 月
項目：気温

■表 4　最大降水量順位【小川】

順位	年	年降水量	年	最大月降水量		年	最大日降水量		年	最大時間降水量		年	最大 3 時間降水量	
1	1991	1830	2004	524	10 月	1999	274	8 月	2010	79	7 月	1999	116	8 月
2	1998	1781	1999	523	8 月	1982	270	8 月	1999	67	8 月	1979	103	10 月
3	1982	1737.4	1990	494	9 月	1991	248	8 月	2007	61	7 月	1991	100	8 月
4	1990	1652	1977	484.8	8 月	2011	208	7 月	2003	55	8 月	2002	98	10 月
5	1999	1598	1982	454.7	9 月	2002	182	10 月	1982	51	8 月	1998	95	9 月

期間：1969 年～2013 年　単位：㎜　。国土交通省ホームページ 水文水質データベースより

■表 5　最大時間降水量 50 ㎜以上の回数【小川】

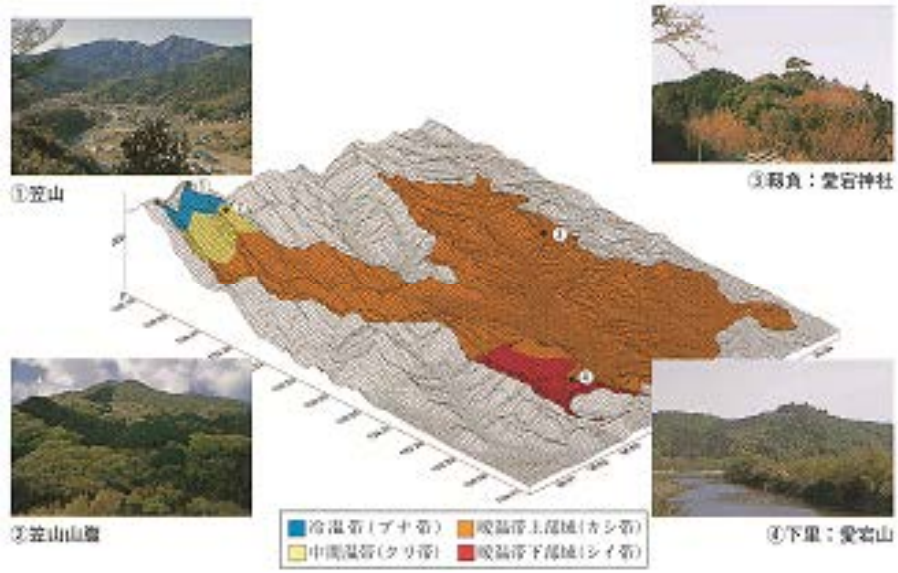
期間(年)	1972～1976	1977～1981	1982～1986	1987～1991	1992～1996	1997～2001	2002～2006	2007～2011	2012～2016
回数	0	0	1	0	0	1	1	2	1
降水量			51 ㎜			67 ㎜	55 ㎜	79 ㎜ 61 ㎜	52 ㎜

期間：1972 年～2016 年　暫定値含む。国土交通省ホームページ 水文水質データベースより

3-1-5　小川町の植生概要

小川町の植物相の特徴は、スダジイやアラカシに代表される温暖帯の植物が分布するとともに、標高の高い笠山ではブナやミズナラなど冷温帯の植物が分布するなど、多様な植物と森林帯が見られることである。このうち下里地区は温暖帯下部域（シイ帯）の最北端の分布境界線に当たり、愛宕山のスダジイ林は胸高直径 1mを超す大木も見られ堂々たる風格の林を形成しており、埼玉県の天然記念物に指定されている。

■図 16　小川町の森林帯



（2003『小川町の自然 植物編』より）

下里・青山地区の現在の森林は、スギ・ヒノキの人工的な植林が多くを占めているが、これは主に第二次世界大戦後の造林によるものである。江戸時代の検地帳には切畑が多く見られるので、林と畑を交互に切り替えながら耕作を行う焼畑や、その周囲に肥料・飼料・燃料として利用できる樸叢（ぼくそう）的植生（草と小雑木の混生）が見られたと考えられる。また、切畑は次第に経済的価値の高いコナラ、エゴノキ、クヌギなどの雑木林に転換されたと考えられ、スギなどの植林が行われる前はこうした林が優位で、薪炭材として利用されていた。こうした里山の落葉広葉樹の林床ではカタクリなどが生育し、現在残る落葉広葉樹林でも群落が見られる。

また、かつては雑木林の稜線付近にはアカマツ林が分布することが多かったが、植林による林相の変化や昭和 50 年代後半からのマツノザイセンチュウによる被害のため、現在では激減している。

なお、里山景観の基本要素の一つである耕地は、下里地区においては槻川沿いの低位段丘面が比較的広いことから、水田が広がっている。江戸時代後期の天保 9 年(1838)の下里村の耕地は、田 34 町 4 反 9 畝 29 歩、畑 43 町 1 反 7 畝 13 歩で、畑のうち約 10 町は山中の切畑である

から、小川町域においては近世から田が多い地区であったことが分かる。青山村は村域が広く、江戸時代後期は相給で村全体の様子が分かる資料が残っていないが、分郷前の宝永元年(1704)の年貢割付状によると田 33 町 9 反 2 畝 20 歩、畑 67 町 1 反 7 畝 6 歩で畑が多くを占め、山地が多いため切畑が 20 町に上る。しかし、田のうち約 3 分の 1 が上田、4 分の 1 が中田で平地部には良田が広がっていた。

慶安 2 年(1649)頃の『武蔵田園簿』と元禄 15 年(1702)の『元禄郷帳』の村高を比べると、下里村で 59%、青山村で 56%も増加している。畑は寛文検地で山中の下々畑や切畑が数多く打出しされたことにもよると思われるが、田は用水整備などにより近世前期に水田が開発された結果と思われる。さらに、現在の平坦で画一的な大きな区画は昭和 63 年から土地改良事業として実施された耕地整理によるもので、古い景観は失われている。一方、下里の島根地区には谷津田が見られ、旧妙楽寺跡のある谷津や寒沢にもかつては谷津田が存在していた。青山地区も矢ノ口・清水入、ほ場整備されているが谷上などに水田が広がり、黒岩や卯月花などにかつては谷津田がみられた。こうした谷津の状況が、古い景観を伝えている可能性がある。

■表 6　スダジイ林組成表

植物名/確認地域	下里愛宕山	下里内寒沢
スダジイ	○	○
タブノキ	○	○
イヌシデ	○	
アラカシ	○	○
コナラ		○
ヤマザクラ		○
ヒサカキ	○	○
アオキ	○	
ヤブコウジ	○	○
シロダモ	○	
エノキ	○	
ヒイラギ	○	
イヌツゲ	○	
シュロ	○	
イヌガヤ	○	
シラカシ		○
マルバウツギ		○
ナガバジャノヒゲ	○	○
オオバジャノヒゲ	○	
チゴユリ	○	
ヤマイタチシダ		○
ヒカゲスゲ		○
テイカカズラ	○	○
キヅタ	○	
ミツバアケビ	○	
ツタ	○	
フジ	○	
ツルグミ		○

■表 7　アラカシ林組成表(下里内寒沢)

アラカシ	ムクノキ
コナラ	タラノキ
クヌギ	ナガバジャノヒゲ
ケヤキ	ツユクサ
ヤマザクラ	ヤブラン
スダジイ	ヤマイタチシダ
シラカシ	ジャノヒゲ
アカメガシワ	ヒカゲスゲ
ヌルデ	ヨウシュヤマゴボウ
コバノトネリコ	チヂミザサ
アカシデ	オオバジャノヒゲ
カキノキ	トチバニンジン
ムラサキシキブ	シュンラン
マルバウツギ	ベニバナボロギク
ヒサカキ	テイカカズラ
チョウジザクラ	ミツバアケビ
シラキ	フジ
ヤマコウバシ	アオツヅラフジ
ヤマウグイスカグラ	イノバラ
ヤマツツジ	ナツヅタ
ヤブコウジ	ヘクソカズラ
アズマネザサ	フユヅタ
コウヤボウキ	ツルウメモドキ
イタヤカエデ	シオデ
シュロ	ヤマノイモ
カバノキ科	ツルグミ
マユミ	
イヌガヤ	
イボタノキ	

■表 8　コナラ林組成表

	下里	青山		下里	青山
コナラ	○	○	コゴメウツギ	○	
ヤマザクラ	○	○	スダジイ	○	
エゴノキ	○	○	ナツハゼ		○
クリ	○		ヒイラギ	○	
アカシデ	○		コマユミ	○	○
クヌギ	○		シロダモ		○
アラカシ	○		ダンコウバイ		○
アカメガシワ	○		ナンテン	○	
コバノトネリコ	○	○	ムクノキ	○	
アワブキ	○		キハギ	○	
ヒサカキ	○	○	クサギ	○	
ヤマツツジ	○	○	チゴユリ	○	○
ムラサキシキブ	○	○	シュンラン	○	○
オトコヨウゾメ		○	ナガバジャノヒゲ	○	○
ヤマウルシ		○	ジャノヒゲ		○
アオハダ	○	○	オオバジャノヒゲ	○	
アセビ		○	ケチヂミザサ	○	○
ツクバネウツギ		○	ヒカゲスゲ		○
アズマネザサ	○		アキノニリンソウ		○
イヌツゲ		○	ノガリヤス	○	○
クロモジ		○	ベニシダ	○	
ガマズミ			ナキリスゲ	○	
ニシキギ	○		ヤマイタチシダ	○	
スギ		○	クサイチゴ	○	
カマツカ			ミツバアケビ	○	○
ヤブコウジ	○	○	フジ	○	
コウヤボウキ	○	○	テイカカズラ	○	○
シラカシ	○	○	サルトリイバラ	○	○
ヤマウグイスカグラ	○	○	ツルグミ	○	○
ヤマコウバシ	○		スイカズラ	○	
アオキ	○	○	センニンソウ	○	
サンショウ	○		ヤマカシュウ	○	
イボタノキ	○	○	ツタ		○
カマズミ	○	○	アオツヅラフジ	○	
マルバウグキ	○		アズマイバラ	○	
モミジイチゴ	○	○	ヤマノイモ		○
ウワミズザクラ		○	オニドコロ	○	
ゴンズイ	○	○	アケビ	○	
モミ		○	ノブドウ	○	
エノキ	○	○	カニクサ	○	
カキノキ	○	○	アマチャヅル	○	
タブノキ	○	○	クマツヅラ		○
ヤブムラサキ	○	○	クマヤナギ		○

3-1-6　史跡指定地ごとの植生概要

下里・青山板碑製作遺跡のうち、割谷地区、西坂下前Ａ地区、内寒沢地区の植生の現況調査（調査日：平成 27 年 12 月 1 日）において確認した群落を整理する。

また、各地区における群落の詳細及び植生図を次に示す。

■表 9　群落確認状況

植生区分	群落名	割谷	西坂下前 A	内寒沢
ヤブツバキクラス域代償植生	アラカシ群落	●		
	ｱｶｼﾃﾞ・ｲﾇｼﾃﾞ群落		●	
	コクサギ群落	●		
	コナラ群落		●	
	ケヤキ群落	●		
	ｸﾇｷﾞ・ｹﾔｷ群落	●		
	アカメガシワ群落	●		
	（伐採跡地）		●	
植林地･耕作地植生	スギ植林	●	●	●
	ヒノキ植林	●	●	●
	ｽｷﾞ・ﾋﾉｷ植林	●		●

割谷地区について

割谷地区の植生について、確認した群落に区分して概要を示す。

アラカシ群落（図 18　凡例 1・写真①）

沢沿いのごく一部、砂防ダム直下にのみ成立している群落である。アラカシは当地における極相段階（植物群落の遷移の最終的な安定した段階）の想定群落構成種であり、この部分だけ土壌条件が比較的良いことをうかがわせるが、砂防ダムの影響もあると考えられる。群落としては若齢である。

コクサギ群落（図 18　凡例 2・写真②）

コクサギ自体はケヤキ群落の斜面林床にも単生する状態で見られるが、沢沿いの一部では高木林が発達しておらず、コクサギ低木林となっている。コクサギは比較的湿った環境を好み、石礫の移動が著しい場所にも適応して生育するので、沢沿いという要素に加えてズリの斜面下方への移動圧が比較的高い環境であることを示唆していると考えられる。

ケヤキ群落（図 18　凡例 3・写真③）

ズリ平場に純群落に近い状態で優占しているが、成因に際しては人為影響の可能性もある。林床は落ち葉かき、下草刈りなどの作業があり、草本と低木は単生するにすぎない。したがってズリの堆積が目視で容易に分かる。

一方で傾斜地はケヤキのほかにクヌギ、コナラなども混じり、薪炭林の要素も残存する。傾斜地の林床は平場よりも下草が多く生育するが、突出して優占する種類はない。

平場のケヤキ群落内にはごく少数だがミズナラが混じることは特筆される。ミズナラは本来冷温帯要素の樹木であり、現地より標高の高い場所を主な生育環境とするが、標高の低い場所にも土地的条件が悪い環境などに希に生育することが報告されている。当地はそうした事例の一つといえ、ズリの堆積が広がる現況は、植生に対してシビアな環境であることが分かる。

ケヤキ・クヌギ群落（図 18　凡例 4・写真④）

要素としてはケヤキの斜面群落と連続しており同様といえるが、クヌギの混交比率が高い部分だけ分けた。コナラも混じり、薪炭林の要素をうかがわせる。

アカメガシワ群落（図 18　凡例 5・写真⑤）

ズリが堆積する尾根の末端にのみ優占している。本種は環境が裸地化した際に先駆的に生育する種類の一つであり、土壌条件のシビアな環境に適応することによって社会的競合を避けているが、植生の遷移とともに衰退していく。この群落も土壌条件が改善され、他の種類が侵入生育することによりやがて他の群落に移行するものと考えられ、その途上にあると考えられる。

スギ植林（図 18　凡例 6・写真⑥）

ヒノキには向かないやや多湿な環境に植樹され、植林として成立している。林床にはジャノヒゲ、テイカカズラ、シダ類などが見られるが、ズリ山部などではそうした草本類の生育密度は平場部のものより薄く、土壌条件の違いをうかがわせる。

ヒノキ植林（図 18　凡例 7・写真⑦）

採掘に伴う谷状地形とその上部の尾根に植樹され、植林として成立している。乾燥気味の環境に植樹して植林とする典型的なケース。

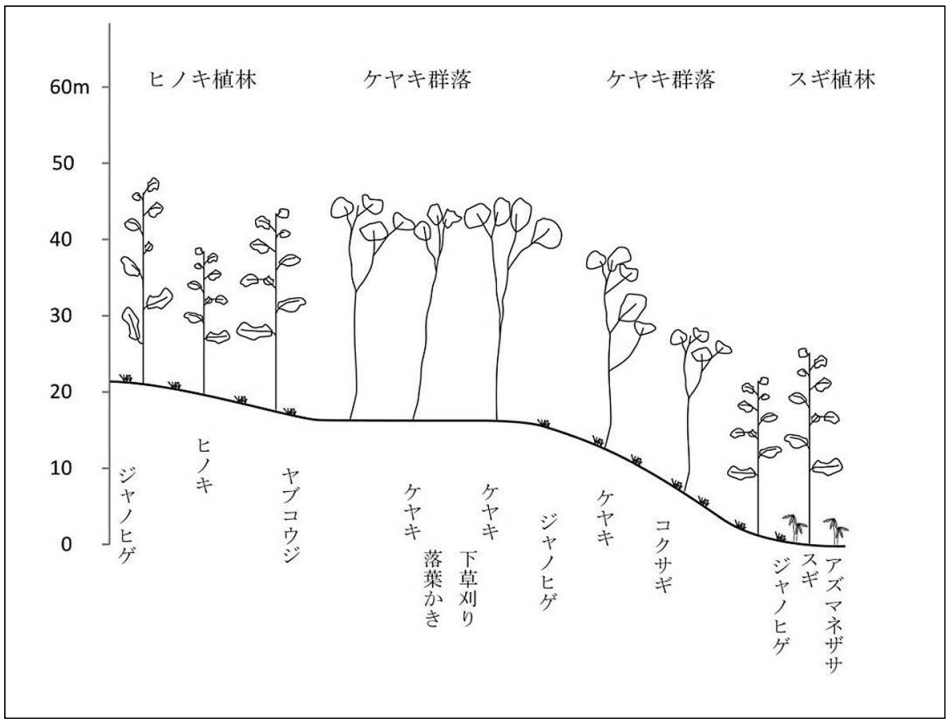
施業形跡は薄く、状態はあまりよくない。土壌の発達が見られるのはズリの堆積がないか少ないためであろう。

スギ・ヒノキ植林（図 18　凡例 8・写真⑧）

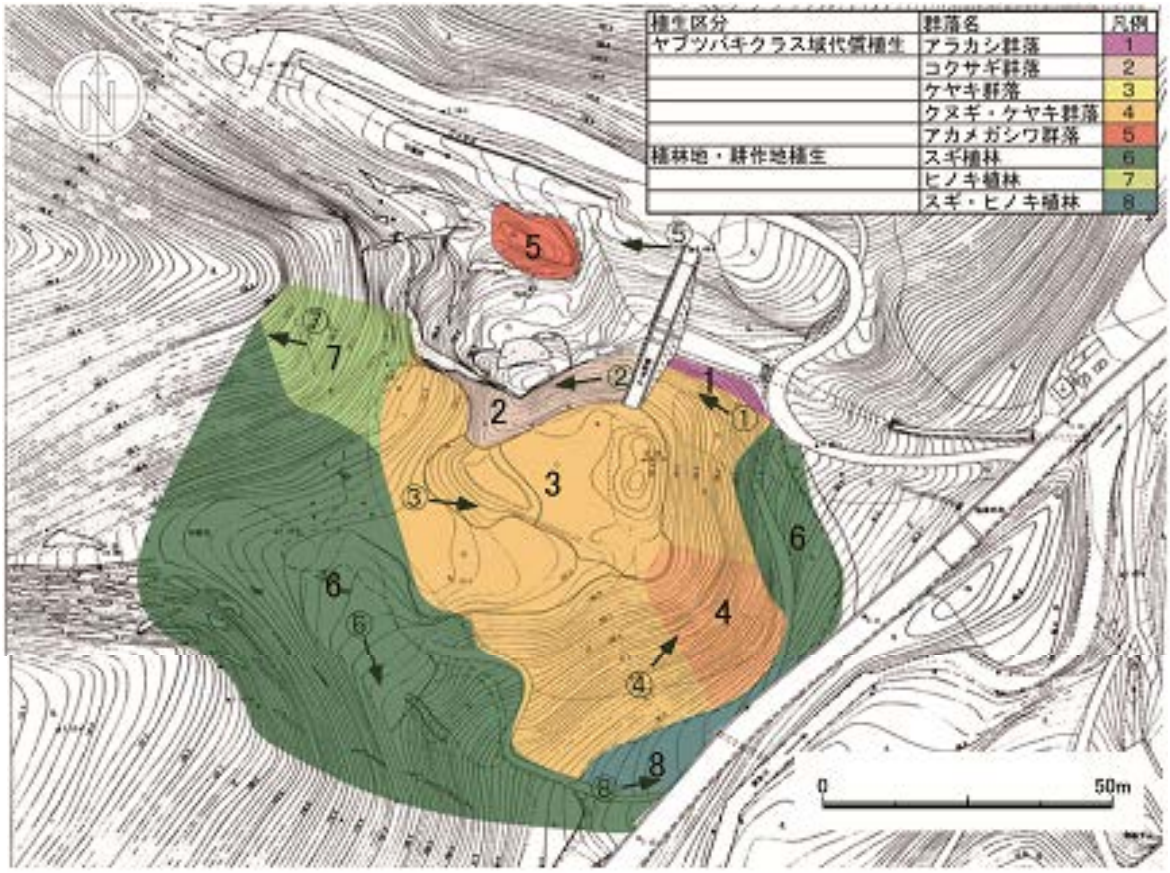
谷底に近い場所にヒノキとスギの比率を同等程度に植樹、あるいは任意間伐され植林として成立している。

上部のケヤキ斜面群落の傾斜度が緩くなる場所で、比較的土壌の発達が見られる。これは斜面上部からズリだけではなく、有機物の流下が集積しているためと考えられる。

■図 17　模式植生断面図（東西方向）



■図 18　植生図（〇数字は写真撮影方向を示す）



西坂下前Ａ地区について

西坂下前Ａ地区の植生について、確認した群落に区分して概要を示す。

アカシデ・イヌシデ群落（図 20　凡例 1・写真①）

植林されていない場所に優占している。カバノキ科の樹木は総じて土地的条件の悪い環境に先駆的に入り込み、よく耐えて生育するので、本群落についてもズリの影響によって遷移が遅れているために残存していると考えられる。

上部にあるヒノキ林も自然状態であればこれに近い群落を形成していたと考えられる。林床は下草、低木刈りの形跡が見られる。

コナラ群落（図 20　凡例 2・写真②）

アカシデ、イヌシデ群落の土壌条件が改善された環境に成立していると考えられるが、極端に優占しているわけではなく、アカシデのほかにクリなども混じる。ズリの表面露出は少ない。

アカシデ、イヌシデ群落もやがてこのコナラ等の群落に移行していくと思われるが、過去の薪炭施業の影響もあるので、この後どれくらい人為的な影響が介入するかで遷移のステージは変化する群落といえる。

伐採跡地（図 20　凡例 3・写真③）

皆伐され、下草や低木類も刈り払われている。季節的な要因に加えて刈り払われていたため、群落傾向を把握することはできなかった。

スギ植林（図 20　凡例 4・写真④）

主に沢沿いに植樹され、植林として成立している。湿度の高い条件にはスギを選択的に植える傾向があり、本群落もそうした意図のもとに植樹していると思われる。施業形跡があることから林業的管理は若干されているようだが出荷を想定した規模ではないように見える。

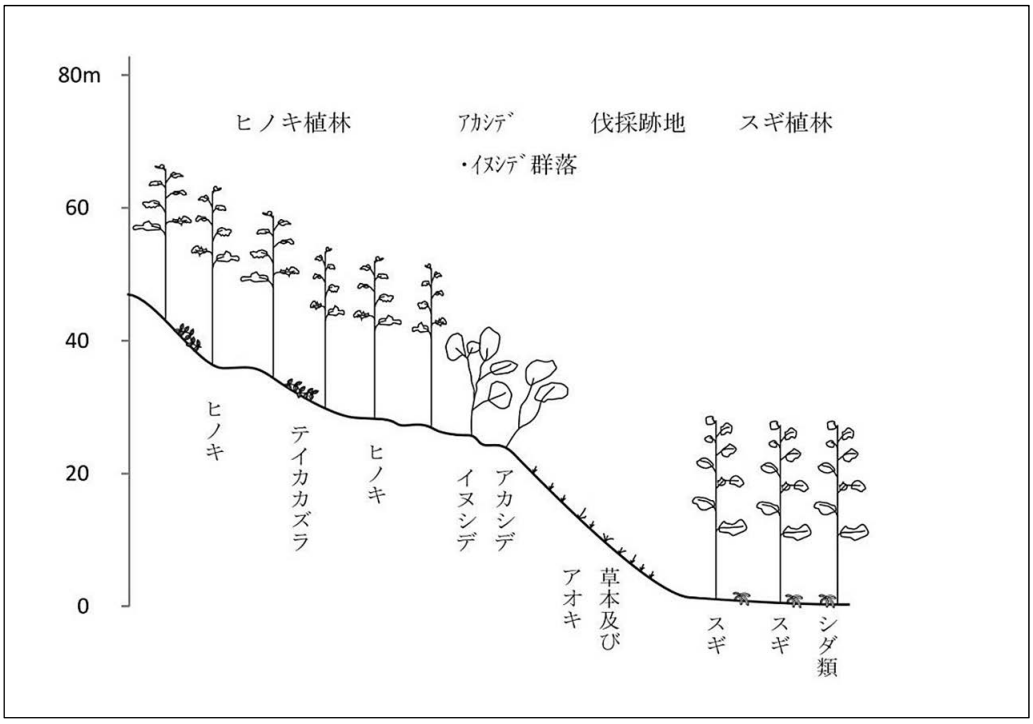
林床はシダ類など暗く湿った環境を好む種類が生育しているが、被覆の度合いは同年齢、類似環境にある他のスギ林に比べるとやや薄く、ズリの堆積が影響していると考えられる。

ヒノキ植林（図 20　凡例 5・写真⑤）

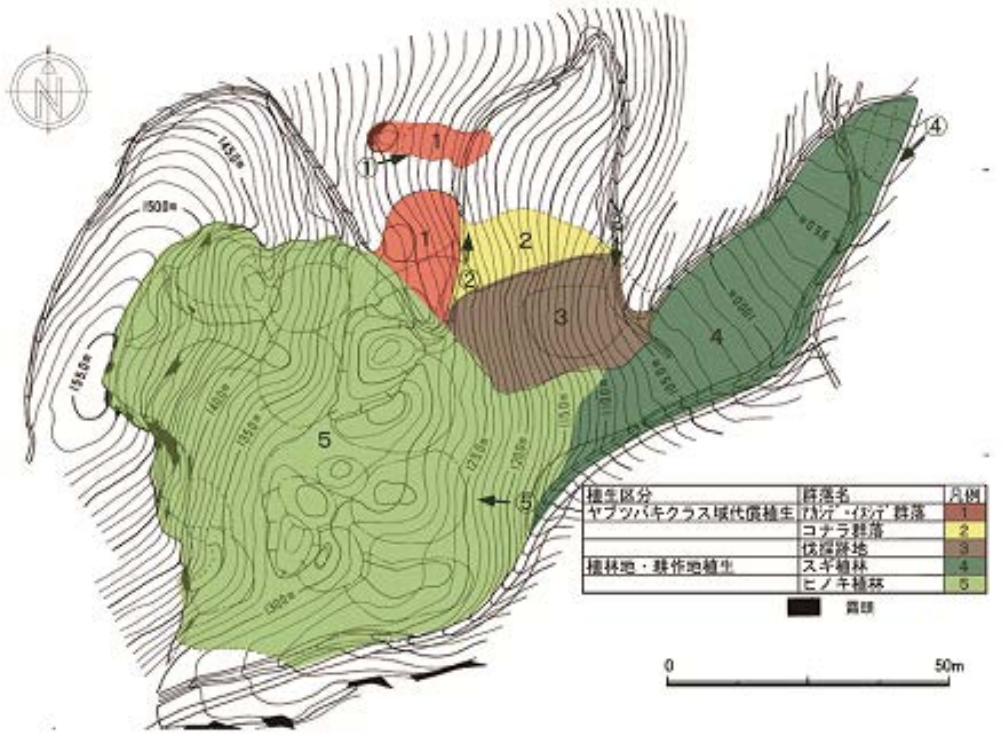
調査地斜面上部一帯に植樹され、植林として成立している。大半が若齢木で間伐はほとんどされていない模様。林床はテイカカズラがマット状となって群生し、半ば地表面を埋め尽くしており、これはヒノキの多くが若齢に加えて間伐されていないために暗く、かつズリが堆積しており、土壌化の進行が遅れているためと考えられる。

一般的に土壌化がそれほど進行していなくても複数種の草本、木本は生育するが、ここでは少ない。これは、ズリの石礫間の隙間が天然石礫地に比べると大きく、それが有機物で埋まる速度が極めて遅いためと考えられる。独特の景観を形成している。

■図 19　模式植生断面図（東西方向）



■図 20　植生図（〇数字は写真撮影方向を示す）



内寒沢地区について

内寒沢地区の植生について、確認した群落に区分して概要を示す。

スギ植林（図 22　凡例 1・写真①）

谷底に接する斜面の下方部に植樹され、植林として成立している。沢沿いのように多湿な環境にスギを選択的に植樹するのは林業の施業としては一般的な手法。スギ・ヒノキ群落に連続しているがやや暗く、林床植生は貧弱であり、日照の影響があると考えられる。

当調査地では上部はヒノキで占められているが、ズリが及ぼす土壌条件は上部がより悪いため、それに応じて施業した可能性もある。土壌条件においてはヒノキの方がより悪い条件に耐えうる。

ヒノキ植林（図 22　凡例 2・写真②・③）

谷底付近を除くズリ斜面、ズリ平場、ズリ山に植樹され、植林として成立している。当調査対象範囲のほとんどを占めている群落だが、調査範囲最上部の最も傾斜のきつい採掘谷、その下方のほぼ傾斜がないか極めて緩やかなズリ平場とズリ山、そのさらに下方の傾斜が緩やかなズリ斜面ではそれぞれ林床の状態が異なる。

斜面最上部に位置する採掘谷では露岩も見られることもあり、植生は貧弱でスゲ類、シダ類などが見られる程度である。崩落形跡も見られる。

斜面中間のズリ平場とズリ山はズリの石礫が厚く堆積しているためか土壌がほとんど発達しておらず、テイカカズラが群落をなして半ば埋め尽くしている。これは西坂下前Ａ地区のヒノキ群落でも見られる傾向で、非常に興味深い植生と思われる。カンアオイの生育も見られるがこれは上部斜面からの崩落等により定着したものと考えられる。また、定着しているのはズリ平場、ズリ山の石礫の移動が

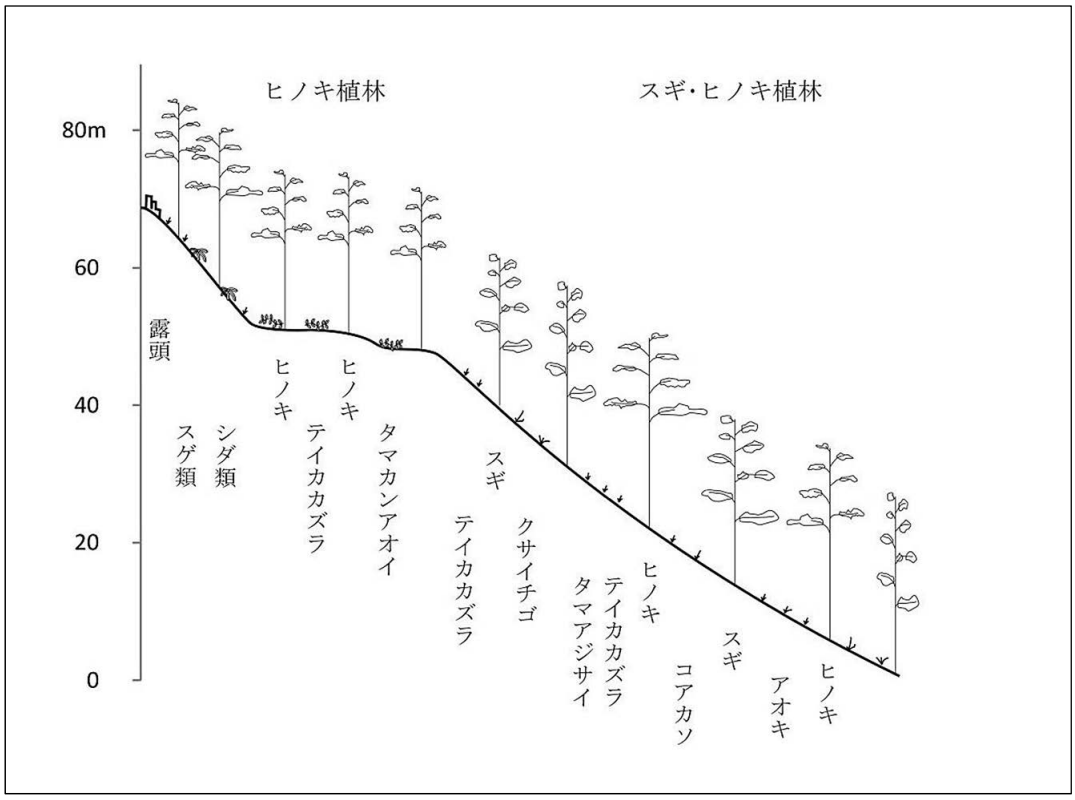
ほぼないことを示唆するものと考えられる。

斜面下部のズリではタマアジサイやコゴメウツギなどの低木類の生育がやや多く見られるが、これは植林の成長の過程で幼齢、若齢の段階で間伐が入り、林床への日当たりが一定期間保たれていた名残りであろう。この過程において低木類の生育を促しただけではなく、薄いながらも土壌の発達も促したものとみられる。

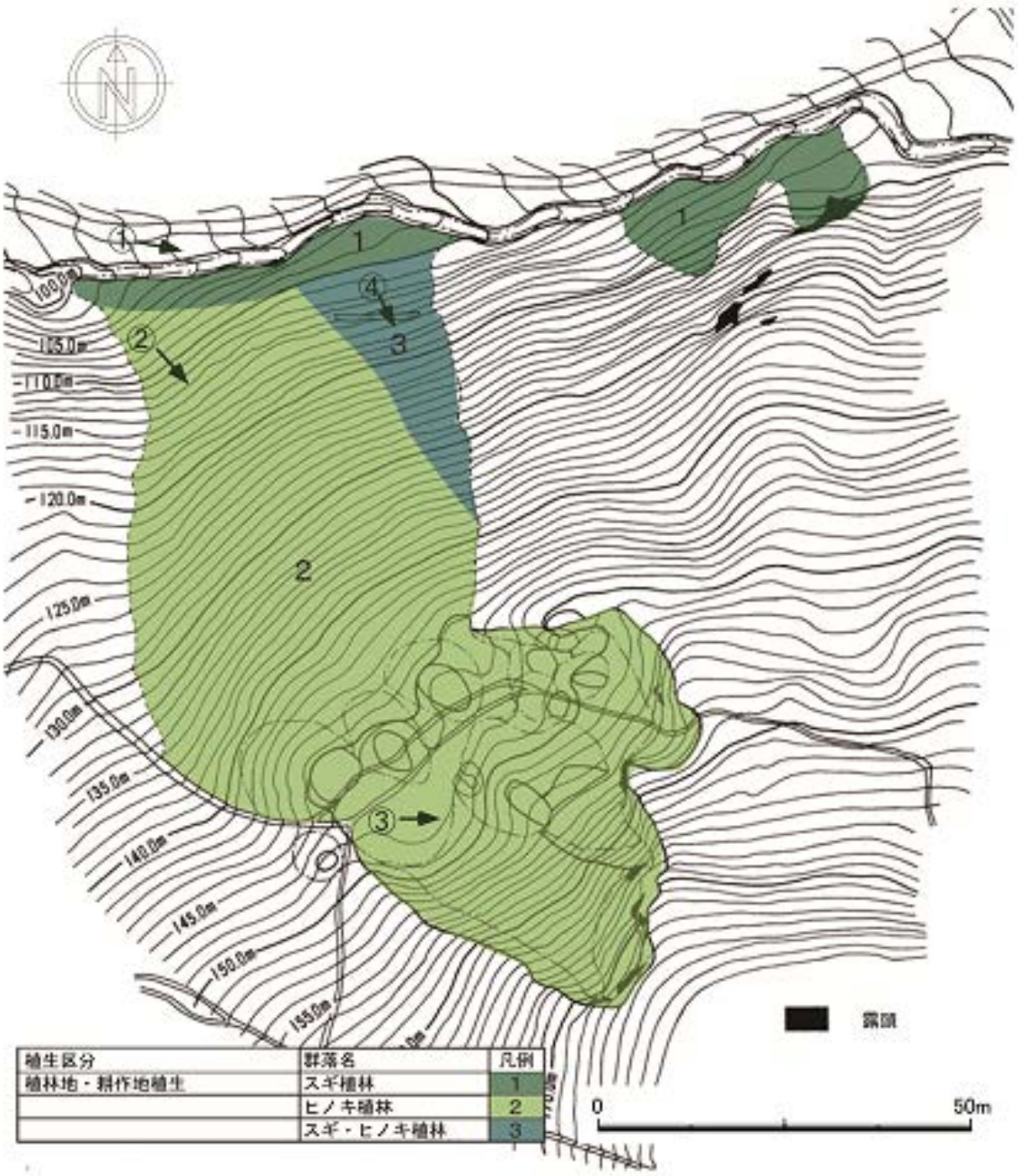
スギ・ヒノキ植林（図 22　凡例 3・写真④）

斜面の下方にあるスギ植林との中間地帯に位置する場所に植樹され、植林として成立している。ややヒノキが多いが植樹段階からの比率が現在まで継続しているかは不明である。林床の土壌条件は隣接するヒノキ群落とほぼ同様で植生も酷似している。

■図 21　模式植生断面図（南北方向）



■図 22　植生図（〇数字は写真撮影方向を示す）



3-1-7　小川町の動物相概要

小川町は山地と平地の中間に位置し多様な環境と豊かな自然が残されているため、様々な動物が生息している。その概要は次のとおりである。

■表 10　小川町内で確認されている動物の種数

種類	科目数	種類	科目数
ほ乳類	12 科 21 種	鳥類	31 科 84 種
は虫類	5 科 11 種	両生類	6 科 13 種
魚類	19 科 55 種	膜翅類（ハチ、アリ等）	40 科 461 種
双翅類（ハエ、カ等）	283 種	甲虫類（カブトムシ、ホタル等）	58 科 701 種
鱗翅類（チョウ）	69 種	鱗翅類（ガ）	32 科 629 種
直翅類（バッタ、コオロギ等）	12 科 84 種	半翅類（セミ、カメムシ等）	50 科 348 種
トンボ類	10 科 51 種	多足類（ムカデ、ヤスデ等）	24 科 70 種 1 亜種
甲殻類	6 科 8 種	軟体動物（貝類）	陸産　12 科 29 種
			淡水産　4 科　6 種

脊椎動物のうちほ乳類、鳥類、両生類、は虫類について下里・青山地区で目撃記録のあるものは、次のとおりである（2000『小川町の自然　動物編』及び生涯学習課職員による近年の目撃情報による）。

ほ乳類

アズマモグラ、ニホンザル、ニホンノウサギ、ニホンリス、ムササビ、ハタネズミ、アカネズミ、ヒメネズミ、カヤネズミ、ホンドタヌキ、ホンドキツネ、ニホンテン、ニホンイタチ、ハクビシン、ニホンイノシシ、ホンシュウジカ

鳥類

カイツブリ、カワウ、ゴイサギ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、トビ、オオタカ、コジュケイ、キジ、イカルチドリ、クサシギ、イソシギ、キジバト、アオバト、ホトトギス、フクロウ、ヤマセミ、カワセミ、アカゲラ、コゲラ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、オオヨシキリ、サンコウチョウ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、スズメ、ムクドリ、カケス、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

両生類

トウキョウサンショウウオ、アマガエル、ヤマアカガエル、トウキョウダルマガエル、ウシガエル、シュレーゲルアオガエル

は虫類

ニホントカゲ、カナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、シロマダラ、ヤマカガシ、マムシ

3-1-8　希少動植物

植物

『埼玉県レッドデータブック 2011 植物編』に記載されている絶滅危惧種、準絶滅危惧種等のうち小川町内で確認されている維管束植物、蘚苔類は、次のとおりである。なお、下里愛宕山のスダジイ林は県の天然記念物に指定されている。

維管束植物（種子植物）

【絶滅】ナガバノウナギツカミ

【絶滅危惧Ⅰ類】アキノハハコグサ、エゾミソハギ、エビネ、オカオグルマ、オニシバリ、オミナエシ、カラマツソウ、キキョウ、キンラン、クロモ、コクラン、コマツカサススキ、コミヤマスミレ、シラン、ニッポンイヌノヒゲ、ハクウンラン、ホソバイヌタデ、マネキグサ、マルミノヤマゴボウ、ミズタガラシ

【絶滅危惧Ⅱ類】アサザ、エゾノタチツボスミレ、カワラナデシコ、ギンラン、サツキヒナノウスツボ、センブリ、ツクバキンモンソウ、ツヅラフジ、トモエソウ、ヒロハイヌノヒゲ、ホタルカズラ、ミツバベンケイソウ

【準絶滅危惧】アカガシ、アケボノスミレ、アズマイチゲ、アマナ、イカリソウ、イチリンソウ、ウリカワ、エビモ、オウギカズラ、オカタツナミソウ、オグルマ、カタクリ、カンアオイ、キクタニギク、キクムグラ、キツネノカミソリ、キンレイカ、クモキリソウ、コカモメズル、ゴマギ、ササバギンラン、ジガバチソウ、シュンラン、シロバナエンレイソウ、シロヤシオ、セトガヤ、タチガシワ、ツルカノコソウ、テバコモミジガサ、トウゴクサバノオ、ナンキンナナカマド、ネコノメソウ、ノヤマトンボ、ハグロソウ、ヒキヨモギ、ヒシ、ヒメミソハギ、ヒルムシロ、フシグロセンノウ、フジバガマ、フユザンショウ、ヘラオモダカ、ホソバノヨツバムグラ、ママコナ、ミゾコウジュ、ミヤマウズラ、ムツオレグサ、ヤマアゼスゲ、ヤマブキソウ、レンゲショウマ

維管束植物（シダ植物）

【絶滅危惧Ⅰ類】オオキジノオ、サンショウモ、ヌカイタチシダ、ヒメカナワラビ、ホソバカナワラビ

【絶滅危惧Ⅱ類】サクライカグマ、ヒメウラジロ、ヤシャゼンマイ

【準絶滅危惧】アカハナワラビ、イヌスギナ、ウラジロ、オオヒメワラビ、カタヒバ、キヨスミヒメワラビ、コバノイシカグマ、シシラン、ナツノハナワラビ、マルバベニシダ、メヤブソテツ

蘚苔類

【絶滅危惧Ⅰ類】クマノゴケ、トサハネゴケ、ヒカリゴケ

【絶滅危惧Ⅱ類】キダチヒラゴケ、コウライイチイゴケ、ツガゴケ、ヒメシワゴケ、ホソムジナゴケ、イチョウウキゴケ

動物

『埼玉県レッドデータブック 2008 動物編』に記載されている絶滅危惧種、準絶滅危惧種等のうち小川町内で確認されているほ乳類、鳥類、両生類、は虫類は、次のとおりである。

ほ乳類

【絶滅のおそれのある地域個体群】ニホンリス、ヒミズ、ヒメネズミ、アカネズミ、ホンドキツネ、ニホンザル、ホンドタヌキ、ムササビ

鳥類

【絶滅危惧Ⅰ類】アカショウビン、オシドリ

【絶滅危惧Ⅱ類】オオタカ、ササゴイ、サンコウチョウ　サンショウクイ

【準絶滅危惧】アオジ、ミヤマホオジロ、イソシギ、タゲリ、ノスリ、ハイタカ、バン、フクロウ

【情報不足】アオサギ、トビ

【絶滅のおそれのある地域個体群】カワセミ

【地帯別危惧】アオゲラ、アオバズク、ウグイス、エナガ、オオルリ、キビタキ、センダイムシクイ、ヒガラ、ホオジロ、ヤブサメ、ヤマセミ、ルリビタキ

両生類

【絶滅危惧Ⅱ類】トウキョウサンショウオ、ツチガエル

【準絶滅危惧】ナガレタゴガエル、ハコネサンショウウオ、トウキョウダルマガエル、ヤマアカガエル

【地帯別危惧】シュレーゲルアオガエル　ニホンアカガエル

は虫類

【絶滅危惧Ⅱ類】タカチホヘビ　ヒバカリ

【準絶滅危惧】アオダイショウ　ヤマカガシ　ヤモリ

【地帯別危惧】シロマダラ　ジムグリ　ニホントカゲ　マムシ

動植物減少の要因

埼玉県の『生物多様性保全県戦略』によると、野生生物減少の理由として（1）森林、沼などの減少（2）緑地の分断による生息地の狭小化（3）天然林の伐採や人工林化、(4）湿田が減少したことによる棲みかや餌場の減少（5）河川や沼、農業用水路の改修による環境の単純化や生息・生育環境の喪失（6）河川や沼への排水による水質汚濁、化学物質や農薬の流入（7）野生生物の採取、踏みつけ（8）森林や草地の管理不足（9）緑地の狭小化や道路舗装の影響等による周辺環境の変化（10）夜間照明による昆虫類の誘引が指摘されている。

また、人との関わりの中で森林などの植物相は歴史的にも遷移しており、それに伴って動物相も大きな影響を受けることになる。『埼玉県レットデータブック 2005 植物編』によると、希少植物の消滅の原因は土地造成や道路工事等の生育地を根底から破壊する土木工事の割合が高いが、減少の要因は多い順に自然遷移、湿地開発、動物食害、園芸採取、森林伐採、農薬汚染であり、こうした小規模な変化はかつてのような里山管理の励行や循環型農業の振興など日常努力で回避できる可能性が高いと指摘されている。

さらに、元々この地域にいなかったが人間活動によって持ち込まれた外来生物によって在来種が駆逐されたり交雑が進み、生態系のバランスが崩れる。外来生物は国外から持ち込まれたものだけではなく、国内からのものも同様で、同種であっても遺伝的に異なる場合があり移植や放虫などにも注意が必要である。